



さざんか

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第19号(R5. 7. 13)

かとう学園の授業で目指していること

本年度、かとう学園の授業で重視していることが2つあります。「対話活動」と「振り返り」です。小学校1年生から中学校9年生まで、10教科すべてで重点的に取り組んでいます。特に、対話を通して学びを深め、協働学習による多面的な思考は学力を向上させます。

現在、GAFAMをはじめ世界のトップ企業は個の力による商品開発よりもチームによる共同開発が主流です。学習の世界でも、チームによる思考形成や問題解決型の学習が世界の潮流になっています。それは、とても合理的なことで、“個学”よりも“協学”の方が学習効果は高いのは当たり前の話です。昔から“3人寄れば文殊の知恵”といわれてきたのはれっきとした科学的根拠をもったことです。

授業中、他の人はどう考えているのだろうか？ 隣の人は何と書いているのだろうか？ と思うのは当然のことで、ペアやグループで対話して、他者の考えから新たな発見をしたり自分の考えを深めたりすることは、飛躍的に学習効果を高めます。授業中の対話は、ただ単にコミュニケーション能力を向上させるだけでなく、思考力そのものを高めます。まずは、他者の意見を正確に理解し、自分の考えを順序だてて説明する。さらに、自分と他者との意見を比較検討し、共通点や相違点を分けし、より高次の考えに組み替えられるように訓練していきましょう。



公開授業後の研究協議会の様子

授業研修の風景

今週も授業研修が2本ありました。どちらも道徳科の研究です。今回は、8年生と9年生の道徳の授業で研修が行われました。いずれも読み物教材が使われました。

齋藤先生(道徳)

9年1組で行われた齋藤先生による公開授業。法やきまりの意義を考え、なぜ世の中にルールがあるのかを対話活動を通して論議する授業でした。

「二通の手紙」という題材。動物園の職員が時間外に二人の姉弟の子どもを園に入れるかどうか。やさしさを取るかルール通りでいくかのジレンマを考える授業。9-1の生徒は、考えられる条件や想定を出し合い、職員のとった行動に賛成か反対かタブレットを使って鋭い議論を各班で展開していました。



宮城先生(道徳)

8年2組で行われた宮城先生による公開授業。人工透析を受けている患者の家族をめぐる家族愛についての難しいテーマを8年生は自分事として論議していました。



実際の生徒作文をもとに考える道徳。作者の母親は腎不全で苦しんでいる。その弟(おじ)は臓器提供を申し出るが、自分だったらどうするかという問いに、タブレットのハートの色で提供するかどうかを意思表示し、ペアとグループで対話活動を行いました。8年生はこの難しいテーマを真剣に考え議論していました。

あと一週間で夏休みです。夏休みはおよそ 1000 時間あります。この時間をどう使うか？ 有効に使うかムダに費やすか、使い方によって大きく差がつかます。勉強にもスポーツや芸術にも大差がでます。大切なのは、自分を自分でコントロールする力です。2 学期の始業式の日、「いい夏休みだった」と言えるか、それとも「後悔の多い夏休みだった」と言うのかは、自分次第です。

筑前大会や県大会さらに上位大会を目前にしている人。部活動を引退し、進路に向けて新しい目標に一步を踏み出した 9 年生。新チームづくりにとりかかった 8・7 年生。それぞれ違った思いの夏休みがはじまります。

夏休みを目の前にした河東中生に、ドイツで活躍するブンデスリーガ・長谷部誠選手の言葉を送ります。

“心は鍛えるものではなく、整えるものだ”

～ サッカー選手・長谷部 誠さん心の作法 ～

プロサッカー選手で凄い人はたくさんいますが、これほど心の自己管理が凄くてそれを結果に出している人はいないでしょう。長谷部 誠選手です。40 歳を目前にしながら、現在もドイツのブンデスリーグで活躍しています。フランクフルトのボランチとして現地でもいまだに評価が高く、ドイツで 15 年もプレーしています。

日本代表から身を引いたものの、代表キャプテンとしての最多出場記録を持っています。歴代監督が最も信頼していた主将とされています。

彼は、小中高と無名選手でした。中学校時代も名門クラブチームではなく部活動生でしたし、高校も県立高校でした。卒業時も、県内のクラブ(エスパルスとジュビロ)からはオファーはなく、両親は反対したものの声がかかったレッズに入団します。

浦和で努力と下積みをつんだ長谷部さんの才能はやがて開花し、当時の代表監督の岡田さんの目に留まります。そして、ワールドカップ 3 大会にキャプテンとして出場するようになります。

長谷部さんの成長と能力開発には、やはり心の置き所とメンタルコントロールにあると言えます。

彼はサッカー選手としては特に特徴がある選手ではありません。足が速いわけでもなく、試合を決定するフリーキックが蹴れるわけでもありません。突出したテクニックを持っているわけでもありません。しかし、彼はあらゆる指揮官に重宝される日本代表の中心人物でした。浦和レッズではタイトルを総なめにし、移籍したドイツではクラブチームを初優勝に導きました。アジアカップでのチーム優勝、ワールドカップへ導き…。彼は一体何を持っているのでしょうか。それは、類まれなるメンタルコントロール力にあります。それをこれから河東中生に伝えます。長谷部さんの著書に、『心を整える。勝利をたぐり寄せるための 56 の習慣』があります。主にこの本とインタビュー記事をもとに紹介します。彼の肝となる言葉はこれです。

「心は鍛えるものではなく、整えるものだ。いかなる時も安定した心を備えることが、常に力と結果を出せる秘訣だ。自分自身に打ち勝てない人間が、ピッチで勝てるわけがない。」

心はよく「鍛える」「磨く」などと表現されますが、長谷部さんは違います。心を「整える」のです。生活のリズム、睡眠、食事、そして、練習。日々の生活から、心に有害なことをしないように、少しでも乱れたら自分で整えます。そうすることによって、いかなる試合でも、いかなる場面でも揺らぐことがなく、ピッチで力が発揮できると言います。実行することはいたってシンプルながら、意識をしないと難しいものです。

ドイツには「整理整頓は、人生の半分である」ということわざがあるそうです。日頃から整理整頓を心がけていれば、それが生活や仕事に規律や秩序をもたらすということです。最後にもう一つ長谷部さんの言葉です。

「今は試合前に自分を落ち着かせるルールを作って必ずそれを行ってからグラウンドに立つようにしてます。例えば必ず 1 時間前に足首にテーピングを巻く、5 分前になったら気持ちをあげる曲を聴く、とか、それは日本代表の試合でも普通の試合でも同じです。」

河東中生の夏休みは、日々「心を整え」て、一日一日を大切に過ごしてほしいと願っています。

